

聖書:ルカの福音書19章41～48節

説教:わたしの家は祈りの家

はじめに

前回は、ゼカリヤ書の預言のとおりによりばに
乗られたイエスが、人々の大歓声のなか入って行
かれるところまでを見てまいりました。そのとき
人々は道に自分たちの上着を敷き、「祝福あれ。
主の御名によって来られる方、王に」と叫びます。
いまヘロデ王がイスラエルの王ではあるけれど、
彼はローマ帝国の言いなりで、道徳的にも墮落
しきっている。そんなヘロデに代わって、イエスが
新しい王になってほしいとの期待の声でもあった
わけです。

そんな歓喜の声でエルサレムに迎えられたイエ
ス。さぞかし喜んだかと言えそうですが、むしろ
エルサレムのために涙を流される。それはどう
いうことか。今日の箇所の一つ目の疑問。そし
てもう一つの疑問。イエスが神殿に入られると今
度は、中で商売をしていた人たちを追い出してしま
います。他の福音書を見ると「両替人の台や、鳩を
売る者たちの腰掛けを倒された」と書いてあって、
随分乱暴な印象です。ふだんは穏やかで冷静に見え
るイエスがどうしてこのようなことをされたのか。
そこにどのような恵みが隠されているのか。ともに
考えてまいります。

1 平和に向かう道

1) エルサレムは知らなかった

42節から44節を読みます。「もし、平和に向か
う道を、この日おまえも知っていたら――。しかし
今、それはおまえの目から隠されている。やがて次
のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して
壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておま
えと、中にいるおまえの子どもたちを地にたたき
つける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほか
の石の上に積まれたまま残してはおかない。それ
は、神の訪れの時を、おまえが知らなかったから
だ。」

将来、エルサレムが敵に攻められて崩壊していく
ことを霊の目でご覧になったイエスは、涙を流して
嘆かれます。これは歴史的な事実ですが、紀元六十
六年に、ローマ帝国へ不満が爆発して民衆が蜂起
し、そこから第一次ユダヤ戦争と呼ばれる戦争が
起き四年間続く。しかし紀元七十年にエルサレム
は焼け落ちて神殿も破壊され、かつてここに人が
住んでいたとは思われないほどになってしまったと

いわれます。まさにイエスが言われたとおりに
なる。

人間的に見ればこの戦争は、ローマ軍から自由
を勝ち取るためのやむにやまれぬ戦いだった。そ
ういう説明になるでしょう。しかしイエスの見方
はずいぶん異なります。「エルサレムが平和に向か
う道をしらなかったから」とか、「神のおとずれ
の時をしらなかったから」と語っています。

2) 「おまえ」

ここで一つ引かかる箇所があります。日本語聖
書ではわかりにくいのですが、元の文を見ると、
「おまえ」ということばが、たった数節の間に十
二回も繰り返されている。それだけではない。44
節で聖書の欄外を見ると、*印があって「直訳：
おまえへの訪れの時」と説明があります。「おま
えへの訪れの時」がどうして「神の訪れの時」とな
るのか。不思議です。このことはまた最後のところ
でふれることにします。

2 宮で

1) 「強盗の巣」(エレミヤ書7章11節)

イエスはエルサレムに入られてただちに神殿に向
かい、そこで商売をしていた人たちを追い出してし
まいます。両替をしたり鳩を売る人たちです。どう
してこのような商売人がいたのか。神殿には地元
の人たちだけで出なく、海外に移住したユダヤ人
たちも礼拝にやってきました。献金しようとするとき外
国の通貨は使えません。きちんとユダヤの通貨で
納めなさいと決まりがあった。それで両替商が必
要になる。また律法には、罪のきよめのために鳩
を献げなさいとあります。けれども、ほとんどの人
は鳩を持って来られない。そんな人たちのニーズに
応えるために鳩を売る人が店を出していた。売る
人、買う人、どちらにもメリットがあるのだから
そんなに目くじらを立てることではない。普通は
そうなのでしょうが、イエスはちがいます。「あな
たが神殿を強盗の巣にしたのだ」と語って非常
に厳しい。「強盗の巣」ということばは、エレ
ミヤ書7章9節から11節に由来します。「あなたがた
は盗み、人を殺し、姦淫し、偽って誓い、バアル
に犠牲を供え、あなたがたの知らなかったほかの
神々に従っている。そして、わたしの名がつけられ
ているこの宮の、わたしの前にやって来て立ち、

「私たちは救われている」と言うが、それは、これらすべての忌み嫌うべきことをするためか。わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目に強盗の巣と見えたのか。」

心の中で盗みや人殺しをしておきながら、神殿に来るときぞ立派な信仰者のふりをして「神さま、感謝します」と言うような人たち、こういう人たちが神殿を強盗の巣にしてしまった、というのです。両替人が悪いのではなく、献金さえすればよいと思っっている心が問題。鳩売り人が悪いのではなく、供え物の形が整ってさえいればよいのだと思っっている心が問題だと言っっているのです。

2) 「祈りの家」(イザヤ56章7節)

ではどのような礼拝をすべきなのか。これもイエスが教えてくださっています。46節前半。「『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。」

「祈りの家」ということばはイザヤ書56章6、7節に出てきます。「また、主に連なって主に仕え、主の名を愛して、そのしもべとなった異国の民が、みな安息日を守ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。」
「祈りの家」には、主の名を愛し、主の契約を守る人たちが招かれています。そこだけ見ただけでも随分敷居が高そうに聞こえます。ところがエレミヤ書7章3節にこうあるのです。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたがたの生き方と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの場所に住まわせる。」

自分たちの生き方と行いを改めた者、そういう者が神の祈りの家に招かれている。イザヤ書だけでも敷居が高いのに、エレミヤ書となるともっと難しいことが出てくる。生き方と行いを改めたくてもできないからみな困っている。もし本当にこうしなければならぬというのなら教会にだれも来られません。もちろんそんなことはない。皆さん安心してここに座ってよろしい。どうして安心してよいのか。これから説明していきます。

3 祈りとは

1) 盗みながら「私たちは救われている」と言う

そこでまず、「わたしの家は祈りの家でなければならない」このことばから始めて行きましょう。ある方はこれを読んで、「私たちは熱心に祈らなければならない」と思うでしょう。もちろんそのとおりなのですが、問題はなにを祈るかです。先ほ

どふれたように、神殿を強盗の巣にした人たちは、心の中にあるものを隠しながら、口先では「神さま、あなたのおかげで私は救われました。感謝します。ハレルヤ。」と言って祈っていました。何が問題なのでしょう。自分の中を見れば一目瞭然。人を憎む心、うらやむ心、嫉む心、そんな醜くて真つ暗な心で一杯です。ところが神の前に出る時だけは、そんなことは隠して良い子ちゃんを演じる。それは神が求めておられる「祈り」ではぜんぜんない。むしろ忌み嫌うべきものだと言うのです。

2) 喜ばしいところを歩んでいたのか

ではどうすればよいのか。そこで鍵となるのがエレミヤ書7章3節です。「改めなさい」と言われるから混乱してしまう。これをわかりやすく言い直してみます。「あなたがたが歩んできた道と行いを振り返り、喜ばしいところを歩んでいたのかよく考えなさい。そうしてから、神の前に自分の姿を申し上げなさい。」

強盗の巣にしてきた人たちのようではなく、心の中にある見えないところにあるもの、そこにあるものを何も隠さず出しなさい。ありのままのあなたの姿を出しなさいと言うのです。罪を改めることができないと申し上げる。

でも、ある方は「そんなことを他人に知られたら恥ずかしい。馬鹿にされる。だからできない」と言います。私もかつてそうでした。しかし、一度勇気を出してありのままのことを神さまに申し上げることができると、どうなったか。なんと自分は多くの荷物を背負って、自分で苦しんでいたのか。神の前に荷を降ろしなさいと言うけれど、こういうことだったのか。本当に肩の荷が軽くなってうれしくなった。そしてもう一つ分かったのは、苦しんでいたのは自分だけでない。実はみんな同じように苦しんでいた。みんな仲間だった。馬鹿にされるのではなく、一緒に喜んでくれた。これが「祈りの家」だった。商売人たちを追い出したのも、私たちをこの家に迎えようとしてしたことでした。

その祈りの家で何を祈るのか。私の中には醜くて真つ黒な思いが渦巻いているのを見て、平気でいられません。この苦しみから助けて欲しいと真剣に願うでしょう。祈りなさいと言われなくても、祈ってしまいます。それが「祈りの家」です。

3) 「あなた」とイエス

いま大歓声を挙げながらイエスを迎えるエルサレムは、やがて手のひらを返すようにしてイエスを拒み十字架に追いやっていきます。神のひとり子がエルサレムに来てくださっていたのに、神の訪れの時を知りません。その結果、エルサレムは陥落し、神殿も破壊されてしまう。そのときからユダヤ人はディアスポラとなって世界中に離散し、二千年経った今でも世界を揺るがすような大きな政治問題になっています。

多くの方がこの問題について解説しています。たいていは、イスラエルとパレスチナ、どちらが悪くてどちらが正しい。そういう視点で解説します。ではイエスはどんなふうに語っているでしょう。「神の訪れを知ろうとしなかったおまえたちが悪い」と突き放しているのか。一見そう見えます。でも最初にもふれたように、44節に不思議な言い方が出てくるのはどうしてか。12回繰り返される「あなた」のほとんどはエルサレムを指すのに、44節の「あなた」だけは、「神の訪れ」と訳すしかない。「おまえたち」が「神」に置き換わるのです。イエスはそう語っている。ということは、神の訪れを拒んだエルサレムはやがて苦しみに遭うことになります。その苦しみは、イエスにとって他人事ではない。いやむしろエルサレムの苦しみをともにしようとしている。そういうことになる。

それはエルサレムだけのことではない。私たちにもつながっていく。私たちはイエスを拒んで十字架につけました。救いを拒んだために、ずっと罪に苦しんで来た。ところが、イエスはどうしてくださったか。この方が、私たちの罪を背負われます。

神殿の中から商売人を乱暴のように追い出す。それほどにイエスは「わたしの祈りの家に来なさい」と招きたいと願っています。この方とともにまた歩んでまいります。